

様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成21年6月25日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18530737
研究課題名（和文） 日本語歌唱における発声と発音の統合的教授法の検証的研究
研究課題名（英文） A Study of integrated coaching of vocalization and pronunciation in Japanese
研究代表者
河本 洋一 (KAWAMOTO YOICHI)
札幌国際大学短期大学部・幼児教育保育学科・准教授
研究者番号 50389649

研究成果の概要：

本研究は、日本語歌唱の理想像を示すのではなく、多様な日本語歌唱の在り方を尊重し、日本語歌唱の指導や考察の観点を提供することの重要性を示した。その上で、日本語歌唱の多様な表現のイメージを伝えたり、発声や発音を統合的に指導したりするためのツールとして、オノマトペを活用した教授法を考案し、一定の効果を確認した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,700,000	0	1,700,000
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	570,000	4,170,000

研究分野：教科教育学

科研費の分科・細目：音楽

キーワード：日本語歌唱・発声・発音・統合的教授法・オノマトペ

1. 研究開始当初の背景

西洋音楽は音楽そのものと共に、歌唱法や教授法を伴って移入された。ベルカント唱法はその一つであり、この発声を基盤にした日本語による歌唱は、和洋折衷の代表例の一つである。

西洋諸国には、母語の発音に基づく発声の体系的な教材や指導法がある。しかし、日本には、日本語の発音を考慮した歌唱教材や、

日本語の歌唱法は必ずしも体系づけられているとは言い切れず、日本語の発音と歌唱における発声とが統合された教授法の確立はこれからの課題であった。

2. 研究の目的

学習指導要領などにおいて日本の伝統文化の尊重が叫ばれるようになって久しいが、日本語による歌唱（以下、〈日本語歌唱〉）と表

記)については、日本独特の情感や作詞・作曲者の歴史的意味について語られることはあるものの、歌唱の教授行為について論じられることは少なかった。また、発声法と発音法は教育現場では別々に扱われることが多く、これらを統合させた平易な教授法の確立が必要であると考えた。

本研究はこのような課題認識にたち、日本語歌唱の教授行為の中でも特に〈発声〉と〈発音〉に焦点を当て、この二つの動作の統一的な教授法を実証的に開発することで、日本語歌唱を教授するための基盤の構築を目指した。

(1) 発声と発音の統合的教授法の開発

日本語歌唱はその教授法が必ずしも体系化されているとは言えない。また、声楽家や教員養成における歌唱指導は、一対一のスタイルによって行われることが多いため指導法が個別化しやすく、有効な教授法があっても、それがどのような理論や技法に基づくのかが顕在化しにくいといった面もある。

本研究ではこのような、いわゆる“秘伝的技法”の実例も視野に入れながら日本語歌唱の発声と発音の統合的教授法の開発することを第一の目的とした。

(2) 幼児期の日本語歌唱の指導者を養成

幼児期は日本語や日本語歌唱の基礎を習得する重要な時期である。

本研究は研究成果を本学の幼児教育保育学科の授業に活用し、幼児期の子どもに対して正しい日本語歌唱の基礎を指導できる人材を養成することを第二の目的とした。

3. 研究の方法

本研究は基礎・理論・実践の三つの領域の研究を年次進行でおこなうことを基本とし、研究の進捗状況に応じてこれらの領域の不足を補いながら、研究総括として日本語歌唱に

おける発声と発音を統合させた教授法とその教材の完成を目指した。

(1) 第1領域：基礎研究

音楽教育学や音声学、音韻学等の先行研究から、日本語歌唱に関する研究を抽出し、研究の観点をより明確にする。また、本研究が実践研究の場として想定している教育現場、例えば幼稚園や幼稚園教諭養成校での歌唱教授行為に関する意識調査を行い、本研究を進める上で配慮しなければならない点を予め整理した。

(2) 第2領域：理論研究

国内外の歌唱指導ができるピアニスト、また、オペラや合唱の指導者の教授行為の比較と指導要素のマトリックス化を試みた。(※ただし、国外の事例については研究の進捗状況から時間的に無理であると判断し、本研究では見送ることとした。)

(3) 第3領域：実践研究

指導要素のマトリックスを基に、日本語の特徴を踏まえた発声と発音の統合的教授法の試案を作成した。また、その試案を学生に対して実践し、指導効果の検証をおこなった。

(4) 研究総括

実践研究で得られた指導効果の検証結果を基に、日本語歌唱における発声と発音を統合させた教授法とその教材の完成を目指した。

4. 研究の成果

(1) 日本語歌唱の教授法に対する高い関心

本研究では 2007 年 2 月に全国の幼稚園 1,000 園を対象にした『子どもがうたう日本語の歌に関する意識調査』(有効回答率 35.7%)を実施した。これによると、これまでに日本語の発声や発音について学んだことがあると回答した幼稚園教諭(園長・主任)

は 31.9 %に留まる一方で、84.1 %の幼稚園教諭が、日本語の歌唱表現について機会があれば学んでみたいと回答している。この数字から多くの保育現場において、日本語歌唱の関心が高いことが示唆される。

またこの調査の自由記述からは、日本語歌唱の教授法への関心だけでなく、日本語で何を伝えるのかといった、日本語歌唱の根本に関わる意見も寄せられた。

(2) 日本語の声の響きそのものに関する研究の重要性

前述の調査によって語歌唱に対する関心の高さが明らかとなった一方、回答した幼稚園教諭の方々がもっている〈日本語歌唱の美しさ〉が大きく二つの観点から述べられていることもわかった。一つは、〈歌われる日本語の響きそのものの美しさ〉という観点、もう一つは〈日本語の歌によって描かれている世界の美しさ〉という観点である。

日本語を母語とする私たちは、生まれたときから日本語の環境の中に置かれ、日本語を話すこと、そして、日本語で歌うことをあるがままに体得してきた。

したがって、日本語の発音や、日本語で歌うことの特徴があまり意識されずに、専らどんな雰囲気の子供の歌い方にするかにばかり関心が集中していたのではないかと、という疑問を筆者はもっていた。なぜなら、日本語の発音や日本語で歌うことについての系統的な学習の機会は、ほとんどないからである。このことは、前述の調査の回答でも指摘されている。

また、声楽家の声帯治療に数多く携わってきた医師・米山文明は、「日本の歌唱法を学ぶ人たちが〈声づくり〉の前に、というよりはそれを省いて〈歌づくり〉に走りすぎている」(米山文明 『声がよくなる本』主婦と生活社 1997 p.330)と指摘している。

人は身体の発達に応じて声にも変化が生じ、小学校に入学する頃には〈児童期の声〉

が完成すると言われている。筆者は保育者養成の短期大学部に勤務しているという職業柄、幼児期の教育現場に立ち会うことがあり、〈児童期の声〉が形成されていく現場を目の当たりにする機会が多い。そのような現場では、「明るく、元気に」という美名の下で、子どもに怒鳴り声のような歌わせ方をさせたり、先生自身が日本語の特性への理解が不足していたりする場面が少なからず散見される。

まさにこれは、米山が指摘する日本語の声に注意を払う〈声づくり〉ではなく、歌の雰囲気や歌っている様子ばかりに注意を払う〈歌づくり〉という状況である。

(3) 日本語の母音に対する多様な感覚

日本語の発音や発声の特性に根ざした教授行為の研究や著書は、極めて少ないのが現状である。(国立情報学研究所 論文情報ナビゲータ CiNii 2006年5月末現在)

日本語歌唱について論じるためには、日本語の音響的側面、知覚的側面、生理的側面といった音声学的領域からの検討、また、日本語の文法的、表現的側面といった日本語学的領域からの検討、さらには、日本語による歌唱表現とその感覚といった音楽表現学的領域からの検討など、多面的な検討を想定した。

また、日本語歌唱の研究を進める上で、研究方法から研究者の恣意的要素を排除するためには、音楽表現に携わる人々の感覚に立脚した考察が重要であると判断し、様々な立場の方々の日本語の響きに対する感覚に着目することにした。

例えば、音響的側面に関しては、測定機器や分析機器が発達していなかった古い時代に、すでに言葉の響きが人間に与える感覚に関する言説が、ソクラテスによって述べられたとされている。

ソクラテスが着目したのは、言葉の特性として字母に本来備わる性質である。そして今

日、言葉の響きが与える感覚については、母語の違いを越えた共通性が認められる事例が確認されている。

言葉は意味を伝える。しかし、ただそれだけではない。その言葉が音として発せられたとき、そこには様々な語感が付加される。この語感を黒川伊保子は、〈発音体感〉と呼び、日本語が母音を主体に音声認識する言語であるとし、子音主体で音声認識をしている他の言語との違いを指摘している。(黒川伊保子『日本語はなぜ美しいか』 2007 集英社 p.88-p.123)

また、日本人が日本語の母音に対して独特の感じ方をしていることは、角田忠信によって指摘されている。(角田忠信『日本人の脳』大修館書店 1978 p.16-p.18)

角田は、日本語で育った多くの日本人は、一つひとつに断片化された母音を、言語脳(左脳)で認識する傾向にあることを、他覚的大脳半球優位側診断法(角田法)で示した。この方法により、角田は、日本人は日本語の母音を言語脳(左脳)優位で認識する傾向を導き出した。

さらに、この傾向が日本語だけのものであるのか否かについても、角田は、日本語と同じように言葉の終わりが母音で終わる場合が多いイタリア語を母語とする人たちとの比較実験を基に述べている。それによると、言葉の終わりが母音であることが母音を言語脳(左脳)で認識することに有意に働くわけではないことが示された。

このように我々日本人は、母音に対して外国語を母語とする人々とは違った感覚をもっていることは注目すべき点である。したがって日本語歌唱の母音に対する感覚を検討することは、日本語歌唱の独自性を踏まえた考察のために、重要な内容であると筆者は判断した。

ただし、この検討は慎重におこなう必要があった。なぜなら、歌のジャンルによって母

音に対する感覚が違うことが予想されたからである。

藍川由美は、「イタリアのベル・カント唱法が、イタリア語を美しく発音するための技術であるように、日本の歌を唱うには、日本語を正しく発音するための発声法を模索する必要がある。」(藍川由美『これでいいのか、にっぽんのうた』文春新書 1998 p.112)と述べている。藍川の指摘は舞台という広い空間で歌われる芸術歌曲を想定している。しかし、それがわらべうたや歌謡曲、民謡等々になれば、当然指摘は違ったものになるはずである。したがって、日本語歌唱の母音に対する感覚の検討は、母音の理想像を単一化するのではなく、母音の多様性を認める方向に進めなければならないと考えた。

そこで、日本語歌唱の母音に対する感覚の検討は、文献検索が可能なものであることを前提に、その多様性を大きく二つに分けておこなった。一つは〈言葉としての日本語の母音の感覚〉、もう一つは、〈歌としての日本語の母音の感覚〉である。

言葉としての日本語の母音の感覚については、まず、言葉としての日本語の特質を把握することから開始した。それを踏まえた上で、日本語の認知的知見に基づく母音の感覚を、黒川伊保子の〈発音体感〉という捉え方を中心に検討した。また、日本語の発音や発声に医師としての立場から問題提起をしている米山文明の〈母音の多様性〉という捉え方を中心に、話し言葉と歌の中での言葉の問題について検討した。

次に、歌としての日本語の母音の感覚については、クラシック歌手の立場からの主張として、男性オペラ歌手の大賀寛の〈母音の統一〉、また女性の歌手からは藍川由美の〈母音の平板化〉といった歌唱技術の問題について検討した。また、クラシック歌手を教育する立場からの主張として、四家文子の〈日本的な「あ」の響き〉、また澤崎定之の〈母音

の中和)という感覚に注目し、歌の中での母音の教授法について検討した。

一方、ポピュラーソング歌手の立場からの主張として、堀江真美の〈母音で歌の素振り練習〉という感覚を、また、ポピュラーソング歌手の教育者の立場からの主張として、福島英の〈音楽的日本語〉という感覚を検討した。

なお、このほかにもクラシック歌手やその教育者また、長唄や義太夫などの伝統音楽の演奏者さらに、子どもが歌うわらべうたからの検討も必要であるが、これについては別の機会に検討することとした。

(4) 日本語歌唱の理想像ではなく日本語歌唱を考える観点の共有化

日本語の母音について、歌手や教育者らがどのような感覚をもっているかを概観した結果、各者の主張には、歌唱の中に母音の響きの重要性を見出しているという共通項があることがわかった。しかし、母音の響きを統一すべきか否か、また母音の響きの多様性とは、どのような面での多様性なのかまで突き詰めていくと、各者の主張は異なってくる。

日本語歌唱の母音の多様性は、母音の響きに性質の大きな違いが求められる場合と、微妙なニュアンスの違いが求められる場合の両方がある。また、その違いは歌のジャンルによっても異なり、それを鑑賞する側の感性によっても異なってくることもわかった。

したがって、日本語歌唱における母音の感覚について、一義的に理想像を導くことは困難であると共に、日本語歌唱の発声や発音の在り方及びその教授法も、唯一の答えが導かれることはないことが、ほぼ明らかとなった。

そこで研究を進める上で、「日本語歌唱とはこうあるべきである。」という言い切り型ではなく、「日本語歌唱をこのような切り口で考える。」という観点提示型の教授法の研究が展開される必要があるという考えに至っ

た。

この考えは、日本語歌唱の多様性を尊重し、必要とされる多様な歌声のイメージを直接的に伝えること、そして、その声の状態を効果的につくり出すこと。この二つの効果を併せもつ教授法を目指すことを意味する。

(5) スポーツオノマトペの援用による日本語歌唱の指導

日本語歌唱の多様性を伝えると共に、その声の状態を効果的につくり出すという二つの目的を達成するための指導ツールとして、本研究は、東海大学共同研究チーム(2005)が研究した「グッ」と握る「サッ」と投げる等の〈スポーツオノマトペ〉に着目した。

なぜなら、この研究成果のうち、「伝達内容の複合性による指導内容の統合化」「記憶の再現性の高さによる指導内容の保持力向上」「語感によるリズムやタイミングの把握の迅速化」の三点は、イメージの直接的伝達や歌声の状態の効果的指導といった本研究が目指す教授法と重なり合う点があると判断したためである。

そこで、この先行研究から「姿勢や発声のイメージ等の複数の動きの伝達の簡素化」「思い出しながらの自学自習の効率化」「動作のタイミングの把握の迅速化」という三つの仮説を立てて、オノマトペを使った歌唱指導の実証実験をおこなった。

その結果、被験者の95%(実験対象学生数80名)に、①「歌唱指導の内容が短時間で行動化」②「指導内容の保持力向上」③「歌唱表現力の拡大」のいずれかの傾向が認められた。(複数回答有)

ただし、これらの傾向には課題が残った。まず、短時間で行動化できるものの具体的な何がどう変化するのが把握しきれないこと。また、指導内容の保持力が数ヶ月、数年といった長期間では検証されていないこと。さらに、被験者の約8割は自分の歌声につい

て、「声域」「声量」「声質」のいずれかに関する問題意識をもっており、オノマトペの活用によってできた改善が、実際の日本語歌唱の様々な場面でも有効であるかどうかの検証が必要であることが、課題として残った。

一方、当初は指導ツールとしてのみ着目していたオノマトペであるが、学会などでの発表を通して、楽音（歌詞）としての多彩な音楽表現の可能性も再認識された。特に、日本語にはオノマトペが多く、子どもの歌（『こどものうた 200』チャイルド本社刊）では 64.5%もの歌の中にオノマトペが含まれている。さらに、子どもの歌の一部には「ビュワーン」「パップンペップン」のような独創的なものが多いことから、オノマトペは日本語歌唱の指導ツールのみならず、日本語歌唱の表現力の拡大に繋がる可能性も示唆された。

今後はこれらの実験結果の傾向をさらに詳しく分析すると共に、実証実験のサンプル数を増やしていく。また、歌唱表現としての多彩な可能性についても研究を継続していく。

（※基盤研究（B）21330206 で平成 21～23 年度の継続研究の予定）

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

◇河本洋一 『日本語歌唱を語る観点についての一考察～母音の感覚の検討を通して～』音楽表現学 vol.5 査読有 pp.77-86 2007

◇河本洋一 『口などによる摸倣音を使った音楽表現試論～摸倣音の技法の類型化と今後の可能性～』音楽表現学 vol.7 投稿済 査読審査待 2009

〔学会発表〕（計 3 件）

◇河本洋一 『日本語歌唱における発声と発音の統合的教授法の検証的研究 1』日本音

楽表現学会第 4 回大会 2006

◇河本洋一 『日本語歌唱における発声と発音の統合的教授法の検証的研究 2』日本音楽表現学会第 5 回大会 2007

◇河本洋一 『オノマトペを使った歌唱表現～声でどこまでできるか～』日本音楽表現学会第 6 回大会 2008

〔その他〕

◇講演『オペレッタなどの歌唱表現の理論と実践』河本洋一 札幌市私立幼稚園協議会（豊平区・清田区）2008 / 日本語を使ったオペレッタのおもしろさとその指導法について、現職幼稚園教諭を対象に講演及びワークショップをおこなった。

◇講演『保育者に必要な資質とは』河本洋一 帯広南商業高校・帯広緑陽高校 2008 / 高校生を対象に保育者に必要な資質全般について講演する中で、日本語で話すことや歌うことへの着目を提言した。

◇指揮 太宰治作・飯田隆作曲『真説カチカチ山』指揮：河本洋一 演出：松橋勝巳 札幌市教育文化会館 2009 / 研究成果を日本語によるオペラ作品の音楽指導で実践し、これを指揮した。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

河本 洋一 (KAWAMOTO YOICHI)
札幌国際大学短期大学部・幼児教育保育学科
・准教授
研究者番号：50389649

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし